

『これやこの』（サンキュータツオ・角川文庫）を読む

山川 晃史

I 序

●裏表紙より抜粋

幼少期から現在までの「別れ」をテーマに綴るエッセイ20篇を収録。記憶と心に奥深く踏み込み、向き合い、真摯な言葉で思いを紡ぐ。「学問×エンタメ」を書いてきた著者の圧倒的境地。

●本書の構成

エッセイ 20 篇のうち、表題作である「これやこの」のみが中編（112 ページ）で、あとの 19 篇は、ほとんどが 10 ページ程度の短編である。

●今日の発表では、「これやこの」以外の**短編（19篇）**について扱う。

まずは、19 篇の概要を以下に記す。

	題名	時期	別れた人	キーワード
1	シーチキン球場	小1～小5	父	シーチキン球場 凧揚げ 転校生
2	空を見ていた	小学校～	ユウキちゃん (いとこ)	阪神大震災 自殺 掲載誌
3	みやばやし	子ども～現在	宮林医師	医院 肖像画
4	明治の男と大正の女	中3	祖母(トシコ)	呼称 夫婦喧嘩
5	蠅の足音	現在⇒中学生?	森本先生	指示語 「その人」 蠅
6	時計の針	中、高～現在	山崎先生	男子校 時計の針の話
7	拝啓ジョディ・フォスター様	中、高～	友人平本の母	映画 ジュディ・フォスター
8	八朔	小、中、高～	祖母	八朔 大和郡山城
9	鶴とオルガン	大学～30歳	同期 ゆん	折鶴 オルガン 自殺
10	バラバラ	大学～	向井豊昭(作家)	『早稲田文学』
11	幕を上げる背中	大学～現在	中川京子(スタッフ)	芸人ライブ 浅草キッド
12	スエコおばさん	子ども?～	スエコおばさん	おじさん 見舞い
13	黒い店	大学～	上野文庫の主人	古本屋 黒い本
14	ツインの老人	大学院	O老人	ホテル 「もう一度」
15	月曜15時	大学院	石井保さん	映画 落語 糖尿病
16	銀色の夏	2019年7月28日	京アニの社員	都市対抗野球 須田幸太
17	百年の柿	3年前～現在	斎藤さん(仮名)	柿 100年
18	カチカチ	2008年～現在	ルサンチマン よしお(芸人)	芸人 馬鹿よ貴方は カチカチ
19	十日間	2022年9月23日	関さん(院の先輩)	十日間 時

●配列について

このように見てみると、「別れ」は、筆者の小学生のころから、現在に至るまで、だいたい時系列に沿って配列されていることがわかる。もちろん、「現在」の筆者から見た「思い」も書かれているわけで、「過去の思い」なのか「現在の思い」なのか判然としないところもある。

なお、17「百年の柿」から19「十日間」の三作は、文庫化に際し、新たに収録されたものである。

●タイトル「これやこの」について

「これやこの」とは、いうまでもなく、百人一首にもある蟬丸の「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」から採られたものである。

直接には、表題作である『これやこの』のラストに引用されるが、表題作だけでなく、本短編集全体を貫くテーマであると言ってよい。

すなわち、本短編集は「別れ」がテーマなのであり、しかも「知るも知らぬも」＝「知っている人も知らない人」も、「分かれと出会いを繰り返す人生」そのものがテーマなのである。

●「あとがき」を読む

著者は、「あとがき」で次のようにいう。

人の死は圧倒的なものから少しずつ、時間をかけて希薄なものになっている。(中略) だれかの「死」はもっと、残されたものが人生をかけて考えるべき問題ではなかったか。死が希薄になったことは、生も希薄になったということだろう。

著者は、「有名人が亡くなってすぐに思い出を語り」、「その人の人生を評価し、その日のうちに消化してしまう」風潮に対して「ご冥福ビーチフラッグ競争」として批判するのである。

だからこそ、著者には恩師である平岡篤頼のことが「消化できていない」ゆえに、書くことができなかったのである。

逆に言えば、作品に挙げられている「別れた人」とは、「人生をかけて考え」たものであるともいえる。

作品を読めばわかるように「別れた人」との「思い出」や「別れ際」は、あっさりしているという印象を受ける。しかし、それは、「人生をかけて考え」た結果、作品として著されているということを理解する必要がある。

II 「表現」を読む

(1) 情景描写から読みとれること

「情景描写」は、単なる描写でないことも多い。「情景描写によって心情が推しはかれる場合」や「情景描写」が何かを象徴的に表現されていることもある。

あれほど高々と風を揚げた腕は、しばらくして白い棒状の物質となり、家族でそれを箸で持ち上げた。ビックリするほど軽かった。(p.123『シーチキン球場』)

父の死にかかわる「焼き場」の叙述である。「白い棒状の物質」という表現が、なんとも即物的であり、逆にギョッとさせられる。「ビックリするほど軽かった」という表現も淡々とした中に、著者の呆然とした様子がうかがえる。

感情を前面に押し出すのではなく、抑制した書きぶりである。もちろん、これは、「現在」の目から、当時のことを思い出して書かれているからでもあり、「当時」の著者の年齢から考えると、「父の死」をきちんと受け止めることができているとは言えないのは言うまでもない。それは、「父の死」を「消化」した現在の著者であるからこそその表現でもある。

同じく、『シーチキン球場』の結末の一文は、次のような文である。

風は新しくできた社宅の植樹や電線にひっかかって、まるで揚がらなかった。(p.125『シーチキン球場』)

父に風を揚げてもらったことが中心に描かれている作品だが、その「思い出」の場であるシーチキン球場が社宅になってしまう。それだけで「物語」は終わらず、まるで揚がらなかった風揚げのエピソードで終わるのである。それは、「父がいなくなった」という「事実」の象徴でもあるのだ。

『鶴とオルガン』を読んでみる。

それから二人で白いルーズリーフを正方形にして折り紙をはじめ。午後の空いた時間はゆったりと流れ、窓から差し込む太陽に部屋の小さな塵が光って輝く。(p.193『鶴とオルガン』)

「ゆん」と著者が部室で将来のことについて語る場面である。

ゆったりと時間が流れ、一見、穏やかで、平和な時間に思える。二人が話す将来の話は、この時点では切実ではない。「罫線の入った白いルーズリーフ」で折った鶴は、この時のゆんの象徴でもある。

「ゆん」は、卒業後、故郷長崎に帰り、その後自殺する。著者は、それを 30 歳くらいになった頃、知ることになる。

結末は、次のような文である。

白いルーズリーフがコンビニなどで売られているのを見るたび、後ろめたいような懐かしいような心持になる。

ゆんが自殺したという情報を何年もたってから知ったことに対する、中途半端な思いがここにある。著者は、「折鶴を見て」ではなく、「白いルーズリーフ」をみると思い出すのである。著者にとっては、「罫線の入ったルーズリーフ」こそが、ゆんとの思い出なのである。

(2) 構成の巧みさ

「構成」の巧みさも本短編集の特徴である。

①「現在」と「回想」

「現在」と「回想」が入り混じる構成もある。

『蠅の足音』は、列車事故の場面（現在）から始まる。「それ」をみながら、著者は中学校時代の森本先生のことを思い出す。森本先生は電車で轢かれて亡くなったのであった。

森本先生との思い出を語りながら、列車事故は「蠅」が集まり、そして、散っていく。

ラストシーンでは、教壇に立つ著者が、森本先生とだぶる。見事な構成である。

②「伏線」の張り方と「回収」

ミステリではないので、必ずしも「伏線」を張る必要はないが、効果的に張られた「伏線」もいくつかある。

『空を見ていた』は、切ない話である。おそらく、この話の「主役」は、阪神大震災であろう。

いとこの「ユウキちゃん」との別れが書かれているが、ユウキちゃんの子ども時代（中学校まで）とその後とでは、描かれ方が全く異なっている。ユウキちゃんが高校の時に起きた阪神大震災によって、家庭崩壊に陥ったのである。

第二段落は「あの頃のユウキちゃんは、空をずっと見ていたんだろう。」で終わっている。ユウキちゃんの絵が緻密であることの叙述があつてのまとめの文である。たしかに、雲の描き方や星空についての話題はあるが、それ以外にも電車や山や花火の絵についても触れられている。最初、この一文を読んだ時、正直「？」と思った。

この話の結末は、ユウキちゃんが亡くなって数か月後に送られてきた写真で終わっている。亡くなる前に撮影した写真がコンテストで入賞したという「オチ」である。そして、「この人は、いつも空を見ていた。」

という一文で終わる。「いつも空を見ていた」という表現には、「私よりはるかにいろんなことができた」幼いころのユウキちゃんと、孤独になってから「空を見ていた」ユウキちゃんが重なっているのである。だからこそ、第二段落の一文は、必要不可欠なものだったのである。

③「最後の一文」の余韻

(1) であげた以外にも、「最後の一文」が、興味深いものが多い。

時計の針はだれかに刺さり続ける。『時計の針』

「これも今年が最後かもしれへんなあ、アハハ」八朔をともにむいたのは、その年が最後であった。

あの頃のことはもうだれも語らないし、どこにも書かれてない。『バラバラ』

私たちは中川さんとともに、まだ何回も幕を上げる。『幕をあげる背中』

死ぬってことは、生きている人たちのためにある現象だ。『スエコおばさん・第一段落最終文』

斎藤さんの奥さんからは、その後も柿や干し柿をいただいている。『百年の柿』

ルサンチマンの浅川は、そのまま「ルサンチマン浅川」としていまも芸人活動を続けている。『カチカチ』

ひとつひとつについての考察はしないが、大きく言えば、「著者とのかわり方の深さの度合」によって、最後の一文の持つ意味の「方向」が異なっているということを付け加えておく。

(3) 時代や世相、流行を挿入させることの意味

時代や世相を反映する語が多く使われているのも、大きな特徴である。いくつか例をあげる。

「貴花田がはじめて優勝した日、そんな祖母は入院をした。」(『明治の男と大正の女』 p.145)

「できたばかりのディズニーランドに連れて行ってくれた。」(『明治の男と大正の女』 p.145)

「さっきそのレコード屋で藤圭子の娘がデビューするってんで歌ってましたよ。」(『黒い店』 p.226)

「松坂大輔が延長 17 回を投げた日も、決勝でノーヒットノーランを達成した日も・」(『黒い店』 p.226)

このような時代や世相、流行を取り入れることで、大きく二つの「効果」があるのではないかな。

一つは、わたしたちは「歴史的な出来事」によって、「その当時」のことを思い出し、「ああ、そうだったな」とふりかえることができるということである。読者が作品を読んだとき、読者自身の「その当時」の生活を自然と呼び起こす働きをしているのである。

もう一つは、時代という「大状況」と名もなき人物の「個別の状況（小状況）」を対置させ、「あの時代のこの人の生き方」が読み取れるということである。「あの時代」に「このような人間が生きていた」ことを示すことで、「大状況」と「個別の状況」を重ね合わせ、「大状況」の中でしか生きられなかった「個人」や「大状況」の中でも「個別の状況」を必死に生きていた人を考えることができるのである。

上で挙げた例は、スポーツ選手の活躍や芸能人の話題である。したがって、「大状況」ではあっても、たとえば、「戦時下」というように切実な状況ではない。けれども、どんな「大状況」であろうとも、名もなき人々が「個別の状況」の中で、たしかに「生きていたのだ」ということを浮かび上がらせる仕掛けになっているのである。

(4) 「言語学者」としての顔の出し方

著者には、さまざまな「顔」がある。「作家」としての「顔」「芸人」としての「顔」、「言語学者」としての「顔」、「俳人」としての「顔」など。

本作では、表題作や「カチカチ」は「芸人」としての文章だし、ところどころに「言語学者」としての顔が出てくる。

「言語学者」としての顔はどこに描かれているのか、いくつか例をあげる。

「あれは横綱になるのかしらん」と祖母が言っていたのを覚えている。「かしらん」を話し言葉で使った最後の世代かもしれない。(『明治の男と大正の女』 p.145)

当然ながら、祖父母は私の前で自らのことを「おじいちゃん」「おばあちゃん」と言っていた。いまは「じいじ」とか「ばあば」とか言ったりする風習も根付いているようだが、祖父母の世代では「おじいさま」「おばあさま」と呼ばなければいけないところを「ちゃん」まで許容しているのだから、だいぶ歩み寄った感覚だったろう。(『明治の男と大正の女』 p.146)

『明治の男と大正の女』は、祖父母（父方）の話である。明治、大正を生きた祖父母の言葉を取り上げ、日本語の「変遷」を考察している。すなわち、「おじいさま」「おばあさま」⇒「おじいちゃん」「おばあちゃん」⇒「じいじ」「ばあば」の変化である。「さま」→「ちゃん」→「敬称なし」の変化は、まさしくこの100年来の呼称の変化であると同時に、日本社会の人間関係の変化でもある。

ついでながら、次のような記述もある。

ソシュールの『一般言語学講義』の初版本や、スタンダーやクロード・シモンの原書まで自宅にあった。(『明治の男と大正の女』 p.149)

当時としては、きわめて稀な家であっただろう。この「祖父」にして、サンキュータツオありというべきか。

「申し訳ありません」という言葉は「申し訳ある」という言葉がない以上その否定形も存在しないことになっているのだが、と。(『蠅の足音』 p.154)

事故のアナウンスをする駅員の言葉。切迫した状況を描く中で、突如、言語学の話が出てくるところが不謹慎ながら何とも笑えてしまう。

このように「本筋」とは外れたところで、「言語学」が飛び出すところが（おそらく著者は「確信犯的」にやっている）おもしろいなと思う。

Ⅲ 3篇を読む（未完・詳しくは口頭で）

19篇、どれも印象に残る作品であるが、ここでは、三篇だけ取り上げ、感想等を述べたい。

(1) 「1シーチキン球場」

父との別れが描かれる。しかし、すでに述べたように、その描かれ方は、抑制的であり、即物的である。著者にとっては、もっとも近い存在であったはずの父。しかし、著者が幼少期のころの出来事である。父の死を「消化」するのに、どれほどの年月がかかったのだろう。物心ついた「はじめての別れ」が父であったということが、死に対する著者特有の「思想」が形成されていった契機になったことは言うまでもないだろう。

(2) 「6時計の針」

中学校のときの「恩師」との別れが描かれる。印象に残る作品をどれか一篇あげると言われたら、「時計の針」をあげる。その理由は・・・・。

(3) 「16銀色の夏」

すでに述べたように、「人との別れ」が淡々と描かれるというのが本短編集の特徴である。著者の感情も露骨には表されないし、「別れた人」の評価についても、積極的に否定も肯定もしていない。もちろん、親しかった人々の別れでは、悲しみが伝わってくるが。

唯一の例外が、この「銀色の夏」であると言ってよい。というよりも、この作品は「書かれ方」が他の作品とは決定的に異なっている。「別れた人」＝「ここでは、京アニ事件で犠牲になった方々」と「主役」＝「須田幸太」とは直接は何の関連性もない。Ⅱ（3）で述べたように、「時代の出来事」がそのまま「特定の個人」に直接「襲い掛かってきた」例といえる。

さて、『銀色の夏』は、プロ野球選手だった須田幸太を描いた作品である。（）

○補足 資料等

①ネット上のインタビュー記事 「読書好日」2020.8.13 抜粋

<https://book.asahi.com/article/13629276>

——なぜ「死」をテーマにしたんでしょうか。

死ぬってということに対して、同世代とちょっと話が合わないんですよ。友達と話していて、まだ人が死んだのを見たことがないとか、身内の死を経験したことがない人が結構いることに気づいたんです。

それで、僕は割と小さい頃からまわりで人が死んできたんだなって、改めて思ったんですよね。僕が七つから八つにかけてのとき、父が48で亡くなりました。いまだに、僕は48までに何かをやらなきゃいけないんじゃないかと思ってるんですよね。死ぬってということが割と身近に感じられている。

——「死」を冷静に眺めているというか、本書で取り上げた人たちとも独特な距離感がありますよね。

僕はどんな人とも仲良くなる時には、この人と死ぬまで付き合うかとか、いつ亡くなるんだろうって考えちゃうんです。友達でも、この人死んだとき線香あげに行くかどうか、自分に問う。

——死を織り込んで付き合っていくわけですね。

死ぬってことは、大ごとではあるんですけど、当たり前のことです。必ず訪れることですし、人は死ぬときは死にます。この本が、これから誰かを亡くすときの心の準備になればいいんじゃないかなと思うんです。

準備ができていないと、死という現実を直視せずにやり過ぎしたり、あるいは必要以上に落ち込んで立ち上がれなかったりします。それはそれで仕方ないのですが、苦しくてもほかに手はなにもないし、苦しんでいい、悲しんでいいんです。そういう感情を消したり軽くすることはできないし、その必要もない。そういう感情と、うまくやっていくしかないのです。

この本を読みながら「自分にもこういう距離感の人いたなあ」なんていうことを思い出して、心の準備をしたり、直視できなかつた大切な人の死を受け入れる作業をしてもらえたらいいなと思います。

——どうやって「死」と向き合うか、ということを考える契機になりそうですね。

この時期になって、ドラマやお芝居でも太平洋戦争を舞台にしたお話が多いっていうのは、やっぱり圧倒的な「生」がそこに存在していて、同時に圧倒的な「死」も描かれているからだと思うんですよね。生きること死ぬことは、連続していることだと思う。

見ず知らずの人でも、特攻に行くだけでもう悲しいじゃないですか。その人に家族がいるとか、こういう交流があったとか、具体的に描かれるだけで悲しい。

ただ、生死の大切さみたいなものを表現するために、いまだに太平洋戦争の記憶にすがらないといけない死生観って、ちょっと脆弱だなと思うんですよね。

昔は、3世代同居が多かった。おじいさんおばあさんの最後の仕事って、死ぬ姿を見せてくれることだと思うんですよ。こうやって人って死んでいくんだっていうのを間近で見ることによって、生きるとか死ぬということをリアルに受け止められていた。今は、そういう経験がないから、やっぱり死に鈍感になってきている。

——死が遠くなっていますね。

それは生にも鈍感になっているということだし、さらに言えば痛みにも鈍感になっているということだと思う。だから、例えば、木村花さんをSNSで中傷して自殺まで追い込むとか、そういうことができるんでしょうね。

僕は、父親に教えてもらったと思うんですよね。もう日に日に干からびていくような感じを、目の前で目撃された。「こんなに苦しいのか」と思いましたし、「この人死ぬな」っていうのはやっぱりわかったんです。

そういう経験をしてない人からしたら、死ぬってどういうことかわかんないかもなあ、と。

——タツオさんにとって「死ぬ」ってどういうことなんでしょうか。

圧倒的現実だから、逃げられない。肌で感じられるものだから。肌で感じられていない人が「なんで死んだらいけないのか」とか「なんで殺してはいけないのか」と理屈で捉えようとするんですけど、そもそも頭でっかちに捉えられる類のものはない感触のものだと思うんです。

死に対して受け身をとり慣れてない人は、どうしても、ただひたすら悲しむとか、真面目に受け取ることしかできないと思うんです。だけど、全然そういうことじゃないんですよね。

まず、本当に全てを出し切った人って満足してると思う。

それから、今回の本の中には自殺した人も何人か出てきますけど、残された人がどうやって生きてくか、自分は誰に何を伝えていくのか。そういうことを考えてみて欲しいと思っています。自殺はいけない、という正論を言うつもりはない。

人の死は、必ず何か残してくれるものがある。振り返らせてくれるものがある。絶対にちゃかしちゃいけないし、軽々しく「死ね」とか言うてはいけないし、神聖な儀式のようなものだと思うんですよね。

②漫才師（芸人）としての「顔」

「米粒写経」公式チャンネル

<https://www.youtube.com/@kometsubushakyo>

③須田幸太

プロ通算16勝9敗37ホールド1セーブ（2011～2018）